自分の思いや考えを進んで表現できる児童の育成
～少人数複式学級だからこそできる授業の工夫を通して～

阿武町立福賀小学校

１　研究の背景

本校は、阿武町の山間部に位置する、全校児童９名の極小規模校で、第２学年が欠学年のため、中・高学年が複式学級編成をとっている。日々の教育活動においては、各学級での複式授業の他、全校道徳や児童会議、福賀ふるさと夢太鼓等、全校児童で行う活動がたくさんある。また、保護者や地域の協力も厚く、コロナ禍ではあるが、感染対策に十分に留意しながら、ふるさと学習や学習発表会、親子もちつき大会等の活動を行った。

しかし、極小規模校ならではの課題も少なくない。特に、学校行事においては、前年度を踏襲しがちで内容が形骸化するばかりでなく、教員の負担感にもつながっている。上記の研究テーマ・サブテーマは授業改善を図るために掲げたものであるが、同時に、新しく着任した教員の視点を生かし、本校の教育活動に新しい風を吹き込むこともねらっている。

２　研究の内容

本年度は、全校児童９名に対して担任４名（１年、中・高学年、特支）という恵まれた環境にあるが、再来年度は、学級減により担任２名となることが予想されている。そのため、現在行っている教育活動を例年どおりに行うことは難しいと考えられるが、教育の質を落とすべきではないことは、全教員が承知している。そこで、個々の教員がもつ『機動力』、『創造力』、『感性』を生かして、極小規模校ならではの教育活動を展開することとした。

⑴　実践事例１　～『機動力』を生かして～

本校校区には、農業や畜産業、林業等、地域素材が豊富にあり、それらを活用したふるさと学習を毎年行っている。ただ、今までと違うのは、仕事の内容だけでなく、その仕事に携わる人たちの思いにまで目を向けているところである。このちょっとした視点の転換が、子ども達の問題意識を生むことにつながり、中学年では再度、無角和種繁殖センターに足を運んだり、高学年では急遽、農業従事者の方を招いて勉強会を開いたりしている。

また、本校校区には、思いがけない季節の訪問者もいる。この秋、学校から４㎞程離れた宇生賀地区にアサギマダラが飛来したとの知らせを聞いた時は、さっそく担任が１年生を自家用車に乗せて（保護者の了解済み）調査に訪れた。優雅に飛ぶ姿を眺めたり、手を差し出して止まらせてみたりと心が豊かに育まれていることがうかがえた。この体験は、11 月の学習発表会で行われた「はらぺこあおむし」を基にした創作劇にも生かされていて、にこやかな表情と柔らかな動作でチョウを演じていた。

図１　チョウを演じる１年生

⑵　実践事例２　～『創造力』を生かして～

本校は、地域の要望により、地域の活動に参加することも少なくない。本年度も、宇生賀地区の昔話についての紙芝居を披露するサークルから依頼があった。しかし、秋は行事が立て込むため、何とか実現できないかと思案していたところ、ある教員から「遠足と紙

芝居を組み合わせてはどうか」という提案があった。それをきっかけに、他の教員のアイデアも膨らみ、５年生の国語科でまとめた「宇生賀の米作りの歴史」とも組み合わせて、例年とは違う「地域探訪遠足」を実施することができた。当日の概要を**表１**に示す。

表１　地域探訪遠足の流れ

①　５年生による「宇生賀の米作りの歴史」についての授業	②　地域の方による紙芝居「宇生賀の七不思議」の披露	③　①②での学びを基にポイントを設定したウォークラリー

最終的に３つの内容を盛り込むことになったが、それぞれにつながりがあり、相乗効果をもたらすことができた。また、５年生にあえて「授業」という形で発表させたことが、場の雰囲気と相まって、いつもと違う生き生きとした姿を引き出すことができた。

⑶　実践事例３　～『感性』を生かして～

本校の転機となった要因に、昨年度、本年度と６名の教員が入れ替わったことが挙げられる。それぞれが今まで積み上げた経験を生かして、「こうしたら子どもたちは喜ぶだろうな」という独自の感性を従来の教育活動に取り入れたのである。

ある教員は、「ワクワクハウス」と称した小屋を校舎前に作った。小屋の側面を夏はアサガオやゴーヤを這わせ（**図２**）、冬は藁葺きにする等、四季折々の景観が本校の自慢の一つとなった。また、ある教員は、煩雑だった図書室を明るく、使い勝手がよくなるようにと大改装した。本棚や机の配置、掲示物等にこの教員の感性が盛り込まれていて、児童のお気に入りの場所の一つになっている。そしてもう一人。本年度の運動会は、コロナ禍で縮小を余儀なくされたが、この沈んだ雰囲気を盛り上げようと、照明塔の柱によじ登ってロープを張り、15 匹のこいのぼりを吊るしたのである。

図２　真夏のワクワクハウス

３　研究のまとめ

冒頭で、「学校行事においては、前年度を踏襲しがちであり、…」と述べたが、この２年間で学校全体の雰囲気が以前より前向きになったとの評価を頂いている。中でも顕著だったのが、学習発表会で行われた地域の方との「おしゃべりタイム」で、１グループ 10 数名の大人を相手に、中・高学年児童が一人で話題を振りながら話合いを進めていたことである。

本研究における実践では、新しく着任した教員を中心に例を挙げているが、以前から在籍する教員もこの雰囲気に触発されたためか、現在、地域の方と一緒に授業を考えている最中である。極小規模校には、しがらみがない。そして、教員の生き生きした姿が、児童一人ひとりの自分らしさを引き出すことにつながっている。この利点を生かして、これからも自由の発想で教育活動を仕組み、児童の育成に尽力していきたい。